

# 障害児教育における 表現・コミュニケーション力の育成と評価

～より豊かでたくましい生活力の育成を目指して～

荒森紀行・国元育子・奥野正二・泉本聖子・船津守久\*・小林秀之\*

## Training and Evaluation of Expression / Communication Capability in Special Education

-Aiming at Training of a Richer and Brawny Life Capability-

Noriyuki ARAMORI, Ikuko KUNIMOTO, Masatsugu OKUNO,

Seiko IZUMOTO, Morihisa FUNATSU and Hideyuki KOBAYASHI

**Abstract.** We considered the changes in communication of the students in our junior high school special education class. It was clearly shown that the capability which should be learned in a junior high school stage can be determined by predicting the capability which is probably needed for them in the future. There are more possibilities to widen their communication methods besides what they had already acquired.

**key words:** special education, communication, an individual instruction plan

### I. はじめに

近年、障害児教育においては次のようなことが重要視されてきている。すなわち、「自立と社会参加を目指し、個々の障害の実態を的確に把握して、一人ひとりの実態に応じて必要な支援を、教育機関のみならず福祉・医療・行政等諸機関連携のもと、生涯にわたって行う。」というものである。

以前より我々は、障害をもった生徒たちに対して「より豊かでたくましい生活力」を身につけさせるべく実践・研究を重ねてきた。そして障害をもった生徒たちの社会的な自立や、豊かな生活の実現のために身につけておくべき力は何かという命題に対する答えのひとつとして、表現・コミュニケーション力の育成をとりあげた。本稿では、障害児学級に在籍する生徒たちの表現・コミュニケーション力の育成に向けてのいくつかの取り組みについて述べる。

### II. より豊かでたくましい生活力の育成を目指したカリキュラム構造

本学級の目指す人間像は「社会的自立をめざした基礎的な知識・技能及び態度を身につけたより豊かでたくましい生活力を有する人間」である。具体的には「のびのびした 明るい子」(情緒の安定)、「げんきな子」(体力づくり)、「すすんでする子」(自主的態度の育成)、「自分の力で できる子」(社会的態度

---

\* 広島大学大学院教育学研究科

の育成), 「よく見 よく聞き よく考える子」(科学的態度の育成) の育成をめざす。

図1は、本学級のカリキュラム構造を図示したものである。我々はより豊かでたくましい生活力を身につけるための基礎となる力として、体力を考えている。これは、今現在の学習を十分に、集中して、また継続して行い、必要な知識や技能を身につけるための体力でもあり、将来にわたって豊かな生活を送るための体力でもある。その体力を基礎として、知識(知的な側面)・技能(能力的な側面)・表現(態度的な側面)の3つの柱をのぼし、それら相互をつなぐ形で総合的な内容を含むものをおいた。これら3つの要素に体力と総合的な内容を含めた5つの側面と各教科等の関係を表1に示す。

表中「リテラシー」は国語・数学から基礎・基本的内容を取り出し、毎日1/2時間ずつ学習する教科、「体力づくり」は毎日1/2時間ずつの、主にランニングによって体力を維持向上させる時間である。「生活」は社会科と理科の内容を含む教科で、「芸術」には音楽と美術が含まれる。「コミュニケーション・英語」は英語という手段によってコミュニケーションの方法を学ぶ教科、「選択教科」は8つの科目から生徒が選択して学習する教科である。「三組活動」は1年から3年までの全員で行う活動で、「学級活動」は各学年ごとで行う活動(H, R)である。いずれも各教科等に代表的な側面という観点で分類整理した。

より豊かでたくましい生活力には様々な力が含まれるであろうが、図中のア～エには特に「表現・コミュニケーション力」「多元的価値観を受容する力」「意思決定力」および「健康・体力」を想定した。「表現・コミュニケーション力」は自分の意思をきちんと伝え、互いに理解し合って相手との良好な関係をもつために必要な力であり、「多元的価値観を受容する力」は、より国際化していくであろうこれからの社会で、様々な価値観を柔軟に採り入れ自分のものにしながら生活していくために必要な力であり、「意思決定力」

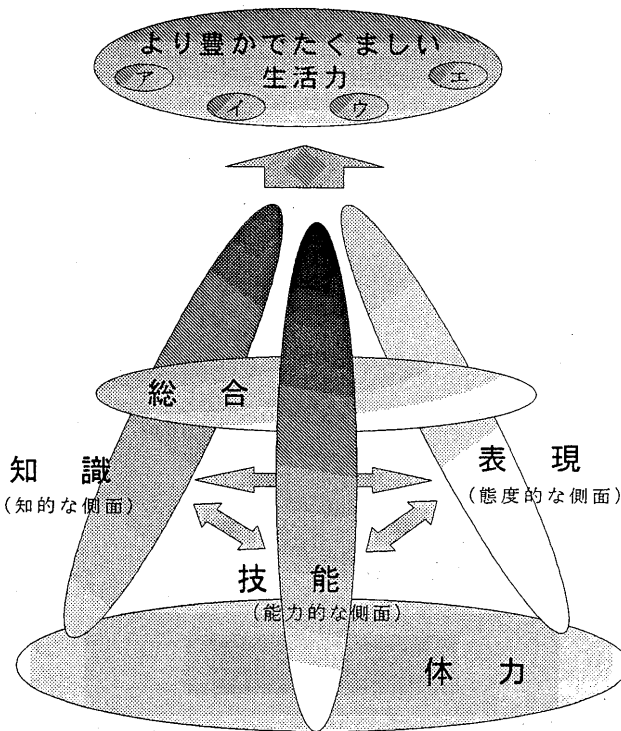


図1 カリキュラム構造図

表1 各教科等と5側面

各教科等	5側面
生活単元学習	総合
総合的な学習	
三組活動	
芸術	表現
体育	
コミュニケーション・英語	
国語	知識
数学	
リテラシー	
生活	
作業学習	技能
選択教科	
学級活動	
体力づくり	体力

は、社会の構成員として自らのとるべき道を自分の責任において決めながら、自分らしい生活を送っていくために必要な力である。また障害とともに生きていく彼らにはそれらに加えて、常に自らの身体に意識を向け自らを律していく力を身につけてほしいとの願いを込めて「健康・体力」を加えた。

### Ⅲ. 変化していくコミュニケーション力と育てたい表現・コミュニケーション力

#### 1 コミュニケーションの変化

図2は東雲中学校3組（障害児学級）の生徒の実態から導き出した個におけるコミュニケーションの変化の図である。図2の下から上への流れは表2（P 130）の左から右への流れに対応している。またコミュニケーションの対象については、図3（P 128）にくわしく示してある。

始めに図2によってコミュニケーションの変化を概観する。

図2の最も左の矢印は、下方から上方へと時間が経過するにしたがって我々のめざす人間像に近づくことを示す。生徒たちの入学以前にさかのぼるほど、彼らのコミュニケーションは生きるために必要なもの、すなわち直接生きることにかかわる飲食や排泄にかかわる内容を伝え表現することに使用される

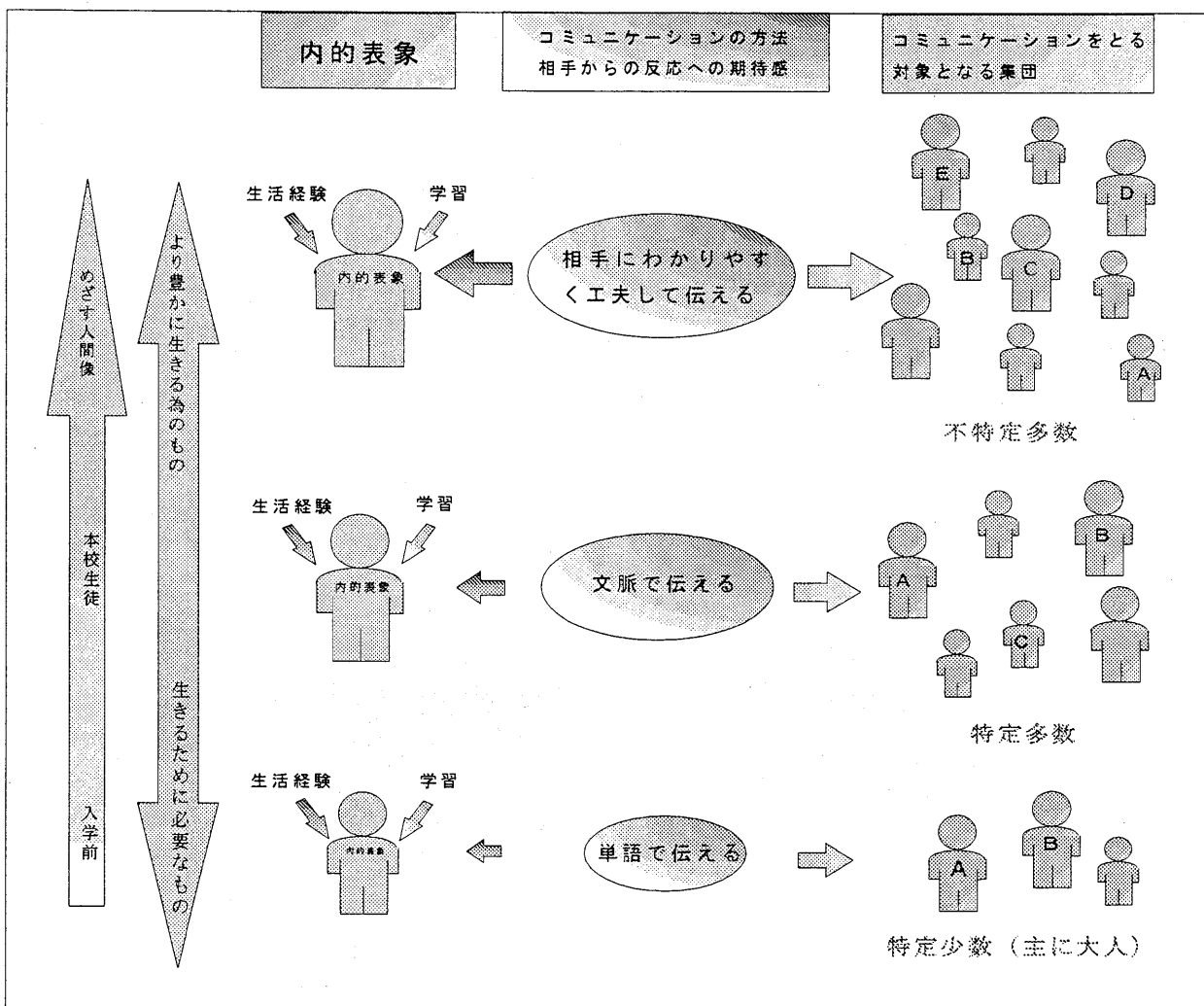


図2 変化していくコミュニケーションのイメージ

傾向が強くなる。逆に上方（卒業後）に進むほど、より豊かに生きるために必要なもの、例えば自己の生涯学習や趣味嗜好等幅広く使用される傾向が強くなる。

内的表象は生活経験や各段階での学習によって蓄積・拡大され、伝えようとする意欲の高まりとなって現れてくる。図の左側の人形はコミュニケーションの主体を示し、その大きさは内的表象の拡大を表す。

コミュニケーションの方法や相手からの反応への期待感という視点で見ると、入学以前の段階では単語で伝えるという方法が多くとられ、発信（右向きの矢印）が受信にまさっているが、入学後は生徒同士の関わりの中で文脈で伝える方法も増え受信する力も育ってくる。さらに卒業後の段階では相手にわかりやすく工夫して伝えることも身につけられ、受信を楽しむことができるようになり、それに伴って相手からの反応への期待感も強くなっていくと考えられる。楕円の大きさはこの期待感の強さを表す。

このようなコミュニケーションの対象は乳児期の母親から始まって次第に拡大し、卒業後には不特定多数を対象とするようになることが予測できる。図の右側の人形はコミュニケーションの対象を表す。

## 2 コミュニケーションの対象の変化

図3は3組の生徒をモデルにして中学校入学以前から卒業後を見通したコミュニケーションの対象（相手）の変化を表したものである。若干前項と重複する部分もあるが、改めて考察する。

乳児期においては、母親とのかかわりが主となる。赤ん坊は、お腹がすいたりおむつが汚れて気持ち悪いと泣く。それとは別に構ってほしい、誰かと一緒にいたいといったかかわりを求めて泣くこともある。このような信号を母親にうまく受け止めてもらい、欲求に応じた対応をしてもらうことにより得られる安心感や信頼感が、その後のコミュニケーション力の基盤となる。この基盤をよりどころに徐々に母親以外の人との関わりも広がっていくが、幼児期までは、それが父親、きょうだい、祖父母、親戚、近所の人など、家を中心とした関わりに限られる。

学齢期にはいると、一気に人間関係が広がる。教師など親以外の権威的な人物や同級生や先輩、後輩

中学校入学以前 ----- 中学校時代 ----- 中学校卒業後

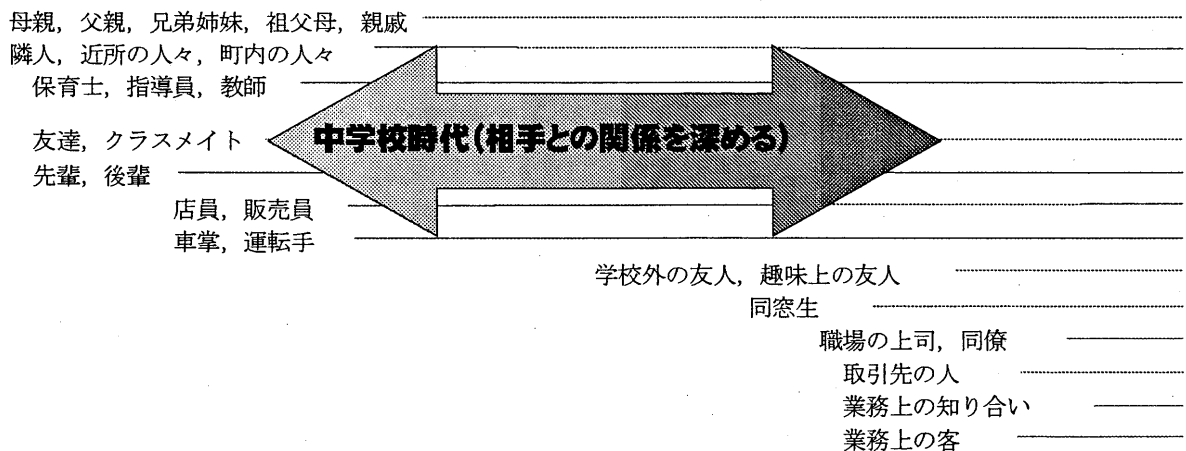


図3 コミュニケーションの対象（相手）

などより多くの子どもとの出会いや関わりを経験する時期である。また、集団生活のなかでやってはいけないきまりや必要とされるルールを初めて要求される時期ともいえよう。しかし、本校に通っている生徒の多くもそうであるように、知的な発達に遅れのみられる子どものほとんどは、小学校では少人数の障害児学級で過ごしてきた。そのため家庭から学校へと社会経験の場は広がっていくものの、人間関係はある程度限られた人数の中での広がりや深まりにとどまり、大人を介したやりとりを中心とする生徒も少なくない。

中学校時代は、コミュニケーションの対象は大きく変わらないが、小学校時代に経験した仲間との関係をより深めていく時期と捉えたい。特に本校の障害児学級は、一学年8名、全学年で24名という障害児学級としては規模が大きい集団である。小学校時代に経験したことのない大きな集団に入ることにより最初は戸惑う生徒も多い。たくさんの個性がぶつかり合い、自己主張するなかで、自分の要求が受け入れられなかったり、言いたいことや思いが伝わらず、ケンカやいざこざも多い。しかし徐々に仲間との距離感をつかみ、それぞれの役割分担ができはじめる。仲間との協力や競争、妥協を学んでいき、大人を介さない仲間との関係を楽しむことができるようになる。また、本校は遠方から通って来る生徒が多く、中学校入学を機に、公共の交通機関を利用して自主通学を始める生徒がほとんどである。それによってバスの運転手や鉄道の駅員、他の利用客との関わりも経験する。その経験が自信となり、その他の生活場面でも、何でも自分一人でやってみたいという気持ちが高まり、買い物や図書館通いなど、家庭や学校以外の場での関係を広げていく生徒も少なくない。

本校卒業後は、障害児学校の高等部や専門学校に進学することにより、さらにより大きな集団を経験し、中学校で培ったコミュニケーション力を応用していくとともに、社会人として生活していくために必要な力を学んでいく時期に入る。

学校生活を終え、一般就労や作業所など職場という新たな環境での新たな人間関係が生まれる時期である。ここでは、上司や同僚、仕事上の知り合いや客まで、好き嫌いに関わらず、出勤や退社時のあいさつはもちろんのこと、仕事の確認や報告、困ったときの相談など、状況に応じた自発的なコミュニケーションが求められる。仕事が器用にできるか、できないかということよりも、いかに職場でコミュニケーションがうまくとれるかということが、障害者にとって仕事をいかに長く続けるかという点で最も重要であることは、卒業生の状況を見ても明らかである。

### 3 育てたい表現・コミュニケーション力について

3組生徒の学校生活の中で見ることのできるコミュニケーション行動をもとにして、3組で育てたい表現・コミュニケーション力を「入学前に育ててほしい力」「3組で育てたい力」「卒業後に必要な力」の3つに整理した(表2参照)。いずれの力も生徒によっては入学後程なく身につけたり、あるいは入学時にすでに身につけているものもいるが、「3組で育てたい力」を中心に、3組での実際の生活に照らしてほとんどの生徒がすでに小学校時代に身につけていると考えられる「入学前に育ててほしい力」や、学齢を過ぎ就労する場合を想定して身につけておくのが望ましいと考えられる「卒業後に必要な力」を含めて、卒業までに身につけてほしいという意味合いである。

表2 東雲中学校3組で育てたい表現・コミュニケーション力

入学以前に育ててほしい力	3組で育てたい力	卒業後に必要な力
構造化/ワンパターン繰り返し	脱構造化～選択・応用	決定・創造
トイレ行きたい合図力 衣服正しく着られ力	トイレ行きたい言え力～トイレ自己管理能力 身だしなみ力～着飾り力（自己中心おしやれ力）	他人のトイレ心配力 他人もうなずくおしやれ力
いうこときかず力 叱られて泣き力 言いつけ力 体の不調を表現力 正しく挨拶でき・返せ力 したいしたくないわかり力 家に電話でき力 定期でバスに乗れ力	いいわけ力～善悪考え力 叱られてはぶて力～神妙に叱られ力 庇い力～「だめよ」と注意力 不調を説明でき力～処置・助けを求め力 自分から挨拶でき力～知らない人にもでき力 自分の意見を言え力～賛成・反対でき力 電話の取り次ぎでき力～電話の対応でき力 カードでバスに乗れ力～切符を買って乗れ力	悪いと認め力 反省改善力 悪いと気づき指摘力 他人の不調がわかり力 いろいろ挨拶でき力 きちんと理由が言え力 必要な電話ができ力 行きたいところにいけ力
一人で悪さ力 大人と遊び力 誰とでも手つなぎ力 他人と話せ力 お片づけでき力 一方的に伝え力	一緒に悪さ力～みんなで悪さ力 好きな友だちと遊び力～だれとでも遊べ力 好きな人と手つなぎ力～必要に応じて手つなぎ力 敬語・丁寧語知ってる力～敬語・丁寧語使え力 自分の片づけでき力～一緒に片づけでき力 ちょっとは受け入れ力	みんなで悪さやめ力 つきあい方変えられ力 手つながなくとも大丈夫力 話し方変えられ力 一緒に空間デザイン力 大幅に伝え、受け入れ力

まず中学校入学前までの段階では、コミュニケーションの目的は生きるため直接必要な内容を伝えることから始まり、少しずつ高度化してくるが、教えられたとおりの繰り返しの内容（構造化、ワンパターン）が多い。

例えば、「トイレ行きたい合図力」は、子どもが大人（親・教師）に何らかの合図を送ることにより、大人は子どもがこの合図をしたときには「トイレに行きたい」のだと伝わるようになることである。この合図は、周りの子どもたちには理解できず伝わらないことが多い。しかしこの力がついていれば、特定少数のみに有効な合図ではなく言葉で相手に伝える「トイレ行きたい言え力」といった力を育てることができ、より多数あるいは不特定の相手に対しても有効なコミュニケーションとなっていく。電話や公共交通機関の利用もできてくるが、日常使用する限定された範囲内で可能であることが多い。

次に、中学生の段階になると、ワンパターンを脱して少しずつ相手や周りの状況を見て選択したり応用したりしながら、自分の思いを少し長い文章の形で伝えることができるようになってくるし、そのような指導も行う。それによって、人とのつながりをさらに深く、もてるようになっていく。

「一緒に悪さ力」を発動した結果何かで叱られたときなど「いいわけ力」によって様々な理由を考え言葉にすることができたり、「庇い力」によって友達が悪くないのだということを切々と説明できたりもする。また、中学校入学以前には体の不調を表現する力が、泣くことや元気のなさだったりしたのが、「不調を説明でき力」が身につけば、いつ、どこで、体調が悪くなっても処置や助けを求めることができるようになる。知らない人にも助けを求めることができるような力をつけておくと安心して行

動できる。

最後に、学校を卒業して社会に出ると、いろいろな人との出会いがある。年齢や立場等の異なる相手と、コミュニケーションをとらなければならないことも少なくない。そうしたときには、それまでの知識や経験をもとに自分でどのようなコミュニケーションを図るかを決定し、創造して行かねばならない。そのとき「他人と話せ力」や「敬語・丁寧語知ってる力～敬語・丁寧語使え力」、「話し方変えられ力」といった力をもっておくと、様々な場面で生かせるであろう。ただ、敬語・丁寧語を状況に応じて適切に使う力や話し方を相手やその場の雰囲気などに応じて変える力は、身につけることがかなり難しいと予想される。

一人ひとりの生徒の実態やその時点で身につけている表現・コミュニケーション力に違いがあるため、卒業時まで各個人の目標を設定したり、修正したりしながら指導していく必要がある。3組の生徒たちが社会の中で生きていくためには、一人ひとりの個性を生かした表現・コミュニケーション力を身につけ、磨くことが必要である。中学校生活の中で身につけられる力は、限られてしまうかもしれないが、豊かな個性からできるだけ多くの力が育つよう支援していきたい。

#### Ⅳ. 個別の指導計画の作成

我々は個々の生徒への支援をより適切に、より確実なものとするためには、①個別の指導計画の作成、②カリキュラムの見直し、③授業形態の検討が必要であると考え、取り組みを行ってきた。ここでは、個別の指導計画の作成について述べる。

個別の指導計画とは、生徒個々の課題を明確にし、設定された中・長期の目標達成のために、どのように支援を行っていくことが必要かを、簡潔にまとめた計画表といえる。本校では、個別の指導計画を作成するに当たり、以下にあげる3つの様式を作成し、取り組みを行っている。

様式1(表3)は、学級担任が保護者との連携のもとに立てた指導計画案であり、長期目標として、卒業時につけておいてほしい力を記入し、短期目標として、長期目標達成に向け学年終了時につけておいてほしい力を記入するようにした。

生徒名		年 組	2年 3組	作成者	
長期目標(卒業後を見据えて)					
<ul style="list-style-type: none"> <li>壁にぶつかったときに、立ち向かっていく強さをつける。</li> <li>誰に対しても、同じように優しくコミュニケーションがとれるようにする。</li> <li>異集団の中で自分から関わりをもつようにする。</li> </ul>					
短期目標(学年終了時を見据えて)					
<ul style="list-style-type: none"> <li>投げ出すずに、課題に向かっていくようにする。(プリント学習での誤答直し等。)</li> <li>周囲の友だちの気持ちを考えた行動を心がける。</li> </ul>					
保護者からの要望					
<ul style="list-style-type: none"> <li>社会性を身につけてほしい。</li> <li>社会的な自立にむけて、いろいろなことにチャレンジしてほしい。</li> </ul>					
目標達成に向けての各教科・領域等における目標・内容・方法					
教科・領域等	目標	内容	方法		
日常生活の指導	友だちをささえる気持ちをもたせる。	朝の会・焼りの会	友だちの意見をしっかり聞くようにさせ、賛同できるときは、応援・協力させる。		
生活単元学習	与えられた役割に責任をもつ。	文化祭・版画カレンダー・思い出を作ろう	多くの係を経験させ、係一つひとつの仕事が大切であることをわからせる。		
作業学習	生き物に対する愛情をもたせる。	夏野菜づくり・軟づけり・土づくり	作物を成長させていくためには全員が優しく、丁寧に世話をする必要があることを理解させる。		
国語	表現・コミュニケーション力をつける。	漢字・説明文・作文	マニュアル的に対応できるものよりも、文章から気持ちを読み取る。自分の思いを文章にすることを多く取り入れる。		
数学	最後までやり抜く気持ちをもたせる。	四則演算・長さ・金銭	解法の道筋をしっかりと理解させ、一つひとつ丁寧に行わせる。		
生活	社会性を養う。	地図・生き物	生活に関わりのある物を取り上げ、人が生活するために何が必要か考えさせる。		
コミュニケーション・英語	苦手意識の克服	英語を使った表現・コミュニケーション	一つひとつの表現をほめていくことで、自信をもたせるようにする。		
芸術(音楽)	周囲の友だちに合わせた活動をする。	合唱・楽器演奏	合唱・合奏を多く取り入れ周りの活動に合わせた音・テンポが出せるようにさせる。		
芸術(美術)	自由な発想	貼り絵・水彩画	表現したい気持ちより形が優先されるので、形にこだわらない自由な発想の作品作りをさせるようにする。		
体育	周囲の生徒をリードする気持ちをつける。	ソフトバレー	得意な運動であるので、チームの柱としてチームメートの動きにも気を配らせるようにする。		
選択教科	友達と協力して作品を作る	社会	一つの作品をみんなで作ることで、協力することの良さを知らせる。		
休憩時間その他	円滑なコミュニケーションをとる	登校時間、休憩時間他	友達とおしの間を大切にさせ、楽しく過ごすにはどうすればよいのかをかんがえさせる。		

表3 個別の指導計画 様式1

芸術(音楽)

一つひとつの言葉を大切に、より確かな歌詞で歌うことができる。
一つひとつの言葉を大切に、より確かな発音で歌うことができる。
歌詞の意味に関心をもち、歌うことを楽しむことができる。
歌の雰囲気を感じとり、表情や身体の動きも合わせて表現することができる。
耳と目からより確かに歌詞を覚え、正しい発音で歌うことができる。
歌詞の意味に関心をもち、一つひとつの言葉を大切に歌うことができる。
一つひとつの言葉を大切に、大きな声と一緒に歌を楽しむことができる。
歌詞の意味に関心をもち、表情や身体の動きも合わせて表現できる。
歌詞の意味に関心をもち、表情や身体の動きも工夫して表現することができる。
歌詞の意味に関心をもち、より確かなことばで歌うことができる。
一つひとつの言葉に関心をもち、歌の内容を意識しながら歌うことができる。
歌の内容に即した声の出し方を工夫して歌うことができる。
ひとつの言葉の意味を考えながら、それに即して歌うことができる。
歌の雰囲気を感じとり、それに合わせた表情や身体の動きで表現することができる。
歌詞の意味に関心をもち、一つひとつの言葉を丁寧に歌うことができる。
歌詞の意味を理解し、一つひとつの言葉を丁寧に歌うことができる。
歌詞の意味に関心をもち、一つひとつの言葉をはっきりと歌うことができる。
歌詞の意味に関心をもち、表情や身体の動きも含めて豊かに表現することができる。
一つひとつの言葉に注意を向け、正しく発音して歌うことができる。
歌詞の意味に関心をもち、一つひとつの言葉を丁寧に歌うことができる。
歌の雰囲気を感じとり、それに合わせた表情や身体の動きで表現することができる。
歌詞の意味に関心をもち、それに見合った表現を工夫して歌うことができる。
歌詞の意味を理解し、それに合わせた表現を工夫して歌うことができる。
歌の雰囲気を感じとり、それに合わせた表情や身体の動きで表現することができる。

表4 個別の指導計画 様式2

生徒名	年 組	年 組	作成者
-----	-----	-----	-----

到達度
A:よくできた
B:できた
C:もう少し

意欲・態度
◎:よくがんばった
○:がんばった
△:がんばろう

		目標達成に向けての各教科・領域における目標・内容・方法				総合評価
		前期	中間評価	後期		
日常生活の指導	目標					
	内容					
	方法					
生活単元学習	目標					
	内容					
	方法					
作業学習	目標					
	内容					
	方法					
国語	目標					
	内容					
	方法					
数学	目標					
	内容					
	方法					
生活	目標					
	内容					
	方法					
コミュニケーション英語	目標					
	内容					
	方法					

表5 個別の指導計画 様式3

また、保護者からの要望の欄には、懇談等で保護者の願いを聴きとり、記入する。目標達成に向けての各教科・領域における目標・内容・方法の欄には、短期目標を達成するために、各教科でどのような力をつけていけばよいのか、どのような内容でつけていけばよいのか、また、どのような方法でつけることができるのかを記入するようにした。合わせて、学校での生活をトータルで考え支援していくためにも、休憩時間や部活動の時間における支援についても取り入れていく必要があると考え、教科・領域に加えてこれらの時間についても記入できるように欄を設けた。

様式2(表4)は、各教科・領域の担当が作成するものであり、様式1をもとに、それぞれの生徒の長期目標、短期目標の達成に向け各教科でより細かな支援を行っていくために活用するものとしている。

また、様式3(表5)は、各教科・領域における年間計画であり、中間評価(前期総合)、総合評価(年間総合)の2つの欄を設け、各時期における生徒の到達度及び意欲・態度の評価を行うように考えている。合わせて中間評価を行った後の後期の目標・内容・方法の再検討・修正、総合評価を行った後の次年度の指導計画を立てるための指導者側の評価も含めて行っていくことで、この個別の指導計画がより有意義なものとなると考え、作成するものとした。

上記の様式を各担当者が記入し終えた後、障害児教育に関わる担任・副担任が一堂に会し検討を行い、修正を加えていき、学校としての最終的な個別の指導計画案とするようにしている。その後、保護者に学校側の考え方を提示・説明し、合意を得るよう考えた。このようなシステムの中で、個々の生徒に関わる者全てが、共通の認識をもち、それぞれの果たすべき役割を行うことができるようになる。また、



この個別の指導計画は、年度当初の早い時期に作成することが望ましく、学期ごとの生徒の評価、指導者側の評価を基に、修正・再検討を行っていくことも必要となると考える。

## V. 終わりに

本校に在籍する生徒達は、今、そして将来において、それぞれの生活環境の中で様々な人たちとのコミュニケーションを要求される。生活を営んでいく上で、このコミュニケーションを如何に円滑に行っていくかということが、豊かな生活を作り上げていくことに大きく関わってくると考えられる。そのために我々は、カリキュラム構造を再検討し、各教科等の関連を明確にした。同時にコミュニケーションの変化を検討し、中学校段階で身につけておくべき力とは何かを、将来必要となるであろう力を予測することで明らかにした。その際、本学級卒業生である東雲青年学級生の現在の姿は大いに参考になった。

ここで明らかになったことは、本学級の生徒については中学校入学時までに獲得したコミュニケーション対象がその後（在学中）拡大することは少ないが、その範囲内でより多数の相手とのコミュニケーションが行われるようになるということ、そして卒業後、特に学齢を終了した後は対象が一気に拡大するということである。したがって、中学校時代は相手との関係を深める時期ということができ、それまでに獲得したコミュニケーションの方法の中から自ら選択したりそれらの方法を応用していく力を育てる必要があるということである。

これらの検討と同時に個別の指導計画の様式を作成し、個々の長期及び短期の目標を設定した。現在の中学校段階で表現・コミュニケーション力をどのような内容で、どのような方法でつけさせることができるのかを検討し、個別の指導計画として作り上げていくことは、大切である。計画を作成することで、各教科・領域及び休憩時間その他においてそれぞれを担当する者が、よりよい支援を行うために如何に関わっていけばよいかの方がより明確になり、それぞれの場面での指導が切り離されたものにならず、互いに密接に関わり合って相乗効果を上げると考えるからである。実際にこの個別の指導計画を作成したことで、関わるもの全てが共通認識をもちやすく、互いの連携がとりやすくなってきている。今後は早期の計画、保護者への提示、保護者との認識の共有をし、学校・家庭における役割を明確にしていくことで、さらに意味のある実践を作り上げることができると考える。

障害をもつ生徒たちにとって、表現・コミュニケーション力を身につけさらに伸ばしていくことは、将来の生活をより豊かにたくましく営んでいく上で大変有用なことである。本稿に記した実践をこれからも継続しさらに改善して、彼らにより豊かでたくましい生活力が身につけられるよう、努力していきたい。

## 引用・参考文献

- 荒森紀行・泉本聖子・石津 充・奥野正二、「障害児教育における基礎・基本の定着と個に応じた指導のあり方～カリキュラムと指導形態の見直しを通して～」．広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』第34集．2002．pp.107～120．
- 荒森紀行・奥野正二・泉本聖子・石津 充・船津守久・小林秀之、「障害児教育における基礎・基本の定着と個に応じた指導の在り方～選択授業の導入と実践を通して～」．広島大学附属東雲中学校研究紀要

『中学教育』第35集, 2003, pp.109~118.